
隔週刊「農業文化マガジン『電子耕』 第172号

-環境・農業・食べ物など情報の交流誌-

2005.12.01 (木) 発行 山崎農業研究所&編集同人

<キーワード>

環境・農業・健康・食べ物などの情報提供、高齢者と若者、農村と都市の
交流ミニコミ誌。山崎農業研究所&『電子耕』編集同人が編集・発行。

http://www.taiyo-c.co.jp/public_html/yamazaki/yama_index.htm

*****発行部数 1360 部*****

□ 目次 □-----

<近藤康男先生の死去の報に接して> 原田 勉

<今週の提言> 日本に農業が必要か 林 尚孝

<読者の声>

大山さんから：ラッセル・アインシュタイン宣言 50周年と憲法9条

<老兵の戯言> 新時代の教育 藤原 昇

<山崎農業研究所情報> 第119回定例研究会のお知らせ

<編集後記> あたりまえがあたりまえでなくなりつつある

<近藤康男先生の死去の報に接して>

11月25日、午前6時、近藤先生死去の報に接して106歳の生涯を想い、万感胸に迫るものがあった。

先生は1899年、愛知県岡崎市の農家に生まれ、第八高等学校の時から農民の側に立つことを志され、東大農業経済学科に進まれた。以来一貫して農民の立場から農業経済学者として一筋の途を歩まれ、農村・農民の中に入り、実証的研究を進め、早くも1932年、『農業経済論』においてマルクス経済学の視点で農業問題を社会科学として確立された。

1943年、思想弾圧により東大教授を追放されたが、戦後は東大に復職、農林省統計調査局長も兼務、食糧供出割当調査と農村民主化のために尽力された。農地改革への参与、共同研究『貧しさからの解放』の出版。『近藤康男著作集』など多数の著作と多くの教え子の中に先生の志は今もなお大きく生きている。

先生の著作・蔵書の全ては、自ら整理された近藤康男文庫として農文協図書

館で公開されている。

<http://www.ruralnet.or.jp/nbklib/book/071kondoubunko1.html>

とくに最晩年の著作として、100歳になってから後輩のために編まれた『七十歳からの人生』は、高齢化社会になった我ら老人の生き方を指し示している。また『三世紀を生きて』は102歳までの人生を省み、過去の反省を含めた名著となっている。

<http://www.ruralnet.or.jp/news/kondou/tankou.html>

続いて思い出エッセイを104歳まで雑誌その他に発表された。

105歳の療養生活に入られてからも、リハビリに努力され最後まで生きる執念を維持され、生命を放棄されることはなかった。

ホームページは、「農業経済学者 近藤康男の3世紀」

<http://nazuna.com/100sai/>

近藤家での葬儀は、12月1日、喪主、近藤淳（長男・こんどう・じゅん）さんにより、近親者のみにて行われました。自宅は非公表。

「お別れの会」は農文協・農文協図書館の主催により、次の通り行われます。

12月12日（月曜）午後1時、港区青山葬儀所にて

（連絡先・農文協03-3585-1141）

山崎農業研究所会員・『電子耕』編集同人

原田 勉

tom@nazuna.com

<http://nazuna.com/tom/>

<今週の提言> 日本に農業が必要か

季刊「農民文学」（2005/10/25号）の巻頭言に農民作家山下惣一氏の「日本

に農業が必要か」という一文が載っている。

『東京・銀座でのシンポジウムで会場の若い女性から「日本に農業が存在しなければならぬ理由は何ですか？」と質問が出た。彼女がいうには東京に農業はない（彼女はそう思っている）のに東京ではたくさんの方が生きている。日本全体がそうであってもいいのではないか、というのである。(略)それにしてもすさまじい時代になったものである。私の百姓人生も五十四年目、来年は古稀を迎える齢になったが、まさかこんな未来に辿りつくとは予想もしていなかった。土と向き合い日目の暮らしに追われて懸命に生きてきて、ふっと顔をあげてあたりを見渡せば、世の中はすっかり様変わりして、われわれが担ってきた伝統的な家業としての農業はもはや時代の邪魔者扱いである。』と書き出し、『自らの存在が否定され、生存の条件が閉ざされていく状況に対して座して黙することはできない。まだまだ老け込みわけにはいかぬ。諸賢に問う。「日本に農業が存在しなければならぬ理由は何ですか？」』と結んでいる。

この文章を読んで、40年前の高度経済成長政策での国際分業論争を思い起こした。所得倍増計画をかかげた池田勇人首相のブレーンである下村治氏は、日本農業は国際競争力がないのだから工業に重点を置き、貿易によって経済成長を遂げるべきだと主張した。この下村治氏の主張が若い女性によって再現されている。このような方向に沿った政策による農村の荒廃は、農村だけではなく、社会全体に蔓延して留まるところがない。姉齒秀次一級建築士の偽装構造計算の根は、儲からない農業を否定する思想にあると思われてならない。

われわれ日本人一人ひとりが「日本に農業が存在しなければならぬ理由は何ですか？」をあらためて自問する必要があると痛感している。

林 尚孝(茨城大学名誉教授；山崎農研顧問)

y.nouken@taiyo-c.co.jp

<読者の声>

●大山さんから：ラッセル・アインシュタイン宣言 50周年と憲法9条

前号で原田氏の主張 「憲法改正・自衛軍の保持反対」に全面的に賛成。

今年は核戦争による人類の危機を訴えたラッセル・アインシュタイン宣言が起草され、当時の著名な物理学者の署名を添えて発表されてから 50 年目をむかえた。

この宣言の決議のなかで、各国政府は戦争を放棄し、紛争の解決には平和的手段を見出すべきであることを強調している。それから 50 年を経たが、いま、日本憲法が危機的な状況にあるといえる。とりわけ 9 条を守ることは、まさにラッセル・アインシュタイン宣言の精神にそった人類史的な意義をもつものである。

また、この夏に広島で開かれたパグウオッシュ会議には 200 人を超える日本の科学者が憲法 9 条が存続の危機に瀕していることにあわせて、ラッセル・アインシュタイン宣言の人類史的な意義を世界の科学者に対し訴えたという。

原田氏の主張に呼応して、「電子耕」でも取り上げていただきたい。

山崎農業研究所会員・日仏農学会会長 大山勝夫

<老兵の戯言> 新時代の教育

筆者は、3 年前から、ニュージーランド (NZ) の小さな田舎町にある日本人経営による大学 (International Pacific College : IPC) で、日本人学生 (1 年生) に「地球環境科学」の講義 (集中講義) をしている。学生数約 600 名弱の単科大学で、学生の約半数は日本人学生である。この大学は、能力別に「少人数セミナー方式」による講義を行って、教育効果を上げている。筆者の「教育理念」にあった大学教育を展開している学校である。

前回、このコラムで、小学校の 2 年生頃から、学童の能力に「差 (違い)」が生じることを述べた。まさに「納得」できる現象ではあるが、それを何とか「修正」しなければ「学校教育」は成り立たなくなってしまう。

もう、30 年以上も昔、愚娘がアメリカの中学校に通っていた頃、学年を越えて、「能力別」に、「時間毎」に、「クラスを移動」していたのを思い出す。

そう言えば「数学」で、「2年上の連中」と授業を受けていたような気がする。

この能力別（最近では、習熟度別）「教育システム」は、日本では「絶対」にできないことであろう。「世に言う」ご父兄（PTA）の「目・声」が厳しいからである。まさに、教育現場に見られる「本末転倒」の現象である。

しかし、現在の「玉石混合」、「味噌も糞」も一緒式で、皆が「平等」でなければ、と云う発想を止めない限り、わが国の教育レベルが上がる「はず」がない。「人間の個性」を埋没させて、全て「一様に」という価値観では、人間は「生きて」いても、あまり「意味」はない。人間には、「個性」があって、初めて世の中を「生きていく」面白さがあるのだから。

藤原 昇

山崎農業研究所会員・中国・浙江大学・客座教授

y.nouken@taiyo-c.co.jp

<山崎農業研究所情報> 第119回定例研究会のお知らせ

今回は、“高校農業教育”をテーマに、フォーラム的に行うこととしております。会員外の方もふるってご参加ください。

1. 日 時：12月3日（土）13：30～17：30
2. 場 所：太陽コンサルタンツ（株）3F会議室
3. テーマ：

地域社会の動きと高校農業教育—その現状と期待—

話題提供者

（1）福島 実氏 群馬県教育委員会 指導主事

演題『高校農業教育の現況—多様なコース
の設定等と目指す方向』

（2）菅谷 明氏 千葉県立茂原農業高校 教諭

演題『農業高校の担う役割について思う』

（3）西川 裕人氏 前・千葉県立流山高校 教諭

演題『高校農業教育と実践活動の歩みを振り返って』

【付記】参加費（会場費等）として500円をお願いします。

(問合せ先)

新宿区四谷3-5 太陽コンサルタンツ(株) 内

山崎農業研究所事務局長・小泉浩郎

y.nouken@taiyo-c.co.jp

TEL.03(3357)5916

FAX.03(3357)3660

<編集後記> あたりまえがあたりまえでなくなりつつある

このメルマガを読んでいる読者の人たちは、多少の差はあっても「日本の農業を守ることは大事」と思っているのではないか。しかし、林尚孝氏が<今週の提言>でふれている女性はちがう。「日本に農業が存在しなくてはならない理由は何ですか?」と問う。

そんなばかな質問があるか、とわたしも思うのだが、さて、この女性を説得できるかというところ結構あやしいところがある。たぶん、わが息子たちに伝えるよりも難しいのではないか。あたりまえのことがわかるには、具体的な生活のなかでのあれやこれやがやはり、あたりまえに行なわれている必要がある。そのあたりまえさがいま、さまざまな分野で崩れつつあるように思えてならない。

作家の辺見庸氏は『抵抗論—国家からの自由』のなかで憲法について、その大きな目的のひとつは市民に国家からの自由を保障することにあるとし、自分は現行の憲法にその保障を“無意識に”求めていた、憲法は国家をしぼるためにあるということは自明であるはずのものであったが、その自明性が崩れつつあると述べている(「憲法、国家および自衛隊派兵についてのノート」)。

あたりまえさが崩れたとき、それを建て直すことは容易ではない。この自明性の取り戻しのためには、論理をつめることも大事だが、具体的な生活の場での実感なり実践なりを重視すべきではないか。食についていえば、農が身近にあることによるこびをおぼえるくらいの感性は持ち続けたいものだと思う。

2005年11月30日

山崎農業研究所会員・田口 均

◎お願い「<読者の声>の投稿規定・メールの書き方」

- 1、件名（見出し）を必ず書いて下さい。「はじめまして」は省略して、言いたいことを具体的に。
- 2、氏名・ハンドルネームは、文末ではなく始めのほうに。
- 3、1回1テーマ、10行位に。
- 4、ホームページを持っている人は、文末に URL を。
- 5、JIS X0208 規格外の文字（機種依存文字）のチェックを。

<http://www.chem.sci.osaka-u.ac.jp/networks/check/jisx0208.html>

インターネットで使えない丸数字や半角カタカナ、括弧入り略号などは文字化けの原因です。

◎投稿アドレス変更のお知らせ

電子耕への投稿アドレスは、発行人の変更に伴い、

y.noken@taiyo-c.co.jp

となっております。投稿される方はこちらのアドレスをお願いします。

次回 173号の締め切りは12月12日、発行は12月15日の予定です。

★『メールマガジンの楽しみ方』発売中

書名：岩波アクティブ新書 45『メールマガジンの楽しみ方』

著者：原田 勉 定価：735円 発行日：2002年10月4日

発行所：岩波書店 ISBN4-00-700045-X

まえがき・目次・著者紹介・注文方法はこちら

<http://nazuna.com/tom/book.html>

『電子耕』から大切なお知らせ

<http://nazuna.com/tom/denshico.html>

http://www.taiyo-c.co.jp/public_html/yamazaki/yama_mailmag.html

<本誌記事の無断転載を禁じます>

隔週刊「農業文化マガジン『電子耕』」 第 172 号

最新号・バックナンバーの閲覧

<http://blog.mag2.com/m/log/0000014872>

<http://nazuna.com/tom/denshico.html>

購読申し込み／解除案内

http://www.taiyo-c.co.jp/public_html/yamazaki/yama_mailmag2.html

2005.12.01（木）発行 山崎農業研究所&編集同人

<mailto:y.noken@taiyo-c.co.jp>

*****ここまで『電子耕』*****